

鳴く虫がつなぐ桂川流域生態系ネットワーク協議会 設立趣意書（案）

日本には、四季折々に自然の中から、さまざまな美を見つけ、楽しむ風習があり、古来、秋の虫たちの奏でる音は人々に親しまれてきた。鳴く虫は、万葉集の和歌をはじめ、俳句、物語、随筆などにしばしば登場し、絵画にも描かれている。また、鳴く虫の飼育に用いられる虫籠などの工芸品もつくられた。このように、鳴く虫を楽しむことは日本の文化として長らく発展してきた。

特に、京都では、平安時代の殿上人が嵯峨野などで鳴く虫を採り、宮中に献上したことが知られている。野外から採ってきたマツムシ、スズムシを籠に入れて飼ったり、庭へ放したりして、鳴き声を楽しんだ様子が源氏物語でも描写されている。また、江戸時代には、嵯峨野、嵐山、小倉山、神楽岡、竹田の里などが「虫聴き」の名所となっていた。

かつては、山野の植物が農業や生活に利用され、植物を刈り取る、火を入れるといった形で人が手を加えることにより、マツムシやスズムシなどの鳴く虫のくらす草地在保たれていた。しかし、化学肥料の導入、農作業の機械化、産業構造の転換などにより、野草の利用が急減して人の手が入らなくなったことや都市化が進展したことで、鳴く虫のくらす草地在消失、縮小、分断されている。また、身近な場所に鳴く虫が少なくなったことや人々の鳴く虫への関心が薄れたことで、虫の音を風流に楽しみ、愛でる習慣は衰退している。

そのような中で、桂川や鴨川の河川敷、嵯峨野の田園、京都御苑などの草地在には、現在もマツムシやスズムシなどの鳴く虫がくらすしている。これらの鳴く虫と共存し、地域の魅力として農業や観光、自然体験・環境教育等に活かしていくことは、人と自然のかかわりの再構築や京都の文化・産業の発展につながると期待される。

このため、京都市内の桂川とその支川の流域において、多様な主体の連携・協働により、野草が花咲き、虫の音が響く自然環境を保全・再生するとともに、鳴く虫文化を継承し、地域・人づくりに活かすことを目的として、本協議会を設置する。

令和5年2月20日